

常田夕美子『ポストコロニアルを生きる—現代インド女性の行為主体性—』

京都：世界思想社、2011年、280頁、2940円＋税、ISBN978-4-7907-1512-2

菅野美佐子

本書は、2000年に東京大学大学院・総合文化研究科に提出された博士論文 *Body, Self and Agency of Women in Contemporary Orissa, India* と、現在までに刊行された（もしくは刊行予定の）12本の論文をもとにまとめられており、序章および終章を含む全8章から構成される。

本書が目指す研究は、「はじめに」に著者自らのフィールドでの経験とともに示されている。1991年に訪れたインド東部のオディシャ州（旧オリッサ州）、ゴロ・マントリ村において、著者自らが既婚女性として強いられた行動規制への違和感と、女性であるからこそ知り得た村の女性たちの豊かな生活世界。そうした経験を契機に、関係性のなかで主体的に自らを価値づけるコンダヨトの女性たちの営為と、そこから垣間見える女性たちの行為主体性を浮き彫りにするという着想へと辿り着く。そこには、インド女性を、単にジェンダー・ヒエラルヒーや家父長的構造へと押し込めてきた、従来の女性研究に対する疑念も背景としてあったようである。以下では各章の内容を簡単に紹介し、最後に若干の検討事項を提示することとする。

序章「現代インド女性とポストコロニアル状況」では、本書の全体を貫く問題の提起と、主題および副題に含まれる「ポストコロニアル」と「行為主体性」という二つの概念の説明がなされる。まず、全体の議論の前提として、植民地的近代のナショナリズムに内在化した〈男／女〉、〈ソト／ウチ〉、〈近代／伝統〉といったジェンダーの二分法が、今日のインドにおいても顕在するという前置きがなされる。この状況を「ポストコロニアル」なジェンダー状況としたうえで、インド女性は、女性の領域として区分けされた「ウチなる世界」で生きることを受け入れてきたことが示される。著者は、植民地期から継続する二分法に特徴づけられたジェンダー状況を前景化させる一方、二項対立的な構造に埋め込まれながらも、他者との日常的な相互交渉を通じて、より良い生活世界の創

造へと向かおうとするインド女性の主体的側面にも目を向ける。このように受容性と創造性を内包する身体実践の諸相を「行為主体性」という概念で提示し、二分法的区分を越境し、「ポストコロニアルの彼方」へと向かうインド女性の行為主体性を検討するという本書の方向性が示される。

第1章「女性の生きる場所—ウチ／ソトと伝統／近代—」では、現代インド村落における空間的なジェンダー区分や、既婚女性の日常における諸行為とその意味に焦点があてられる。まず、女性の1日が紹介され、序章で論じた「ウチ」と「ソト」というジェンダー区分に符合するかたちで、男女による生活空間の区分けが示される。村に嫁いだ女性は、「ウチ」なる領域とされる屋内、裏庭、裏道を主たる生活空間とし、「同じ土釜」から食べる「ウチの人」とともに日常を過ごす。既婚女性には、家事のほか親族関係の維持、祖先供養、誓願儀礼など、伝統を保持するための種々の役割が期待される。さらに、そのためには勤勉に働き、沐浴や食物の禁忌、外出の制限を遵守することで自らの身体を清浄に保ち、厳しい食事制限や断食によって家族の安寧を祈る、献身的な妻、母、嫁であることが求められるという。著者は、自らを律する日常実践は、「自己統御」というインド女性に不可欠な資質によって可能になるとする。「自己統御」の実践には心身ともに苦痛が伴うが、家族や祖先のためにそれを成し遂げることは、女性たちの自己の存在価値を確認する契機ともなりうる。このような伝統の維持をめぐる実践から、村の女性たちが自らのアイデンティティを形成していく可能性が検討されている。

第2章「関係性のなかの人生—身体—人格とライフコース—」では、関係性のなかに埋め込まれたインド女性の身体に視点が移される。ここでは、フーコーや西欧フェミニズムによる歴史的・文化的文脈や言説から切り離された「西洋的身体」は想定されていない。むしろ、身体は可変的で流動的なあらゆる物質との社会的つながりを持ち、その意味で人格をも包摂する「身体-人格」であることが示される。女性の「身体-人格」はそのつながりのなかで、シャクティという無限の力の媒体となるのである。たとえば、胎児は父母の体液の結合によってつくられ、出生後は母乳を通して、母から子へとシャクティが媒介される。また、婚姻や葬送の儀礼では、食事を通じて同じ物質を共有することで、家族や親族としてのつながりが確認されるという。すなわち、インドにおける

身体は常に社会的関係のなかに埋め込まれており、とりわけ女性の身体は妊娠、出産、食事の支度、祖先供養を通して、家族や親族をつなぐ結節点となることが示され、次章の初潮儀礼をめぐるより具体的な議論へと続く。

第3章「個的经验の共同性—初潮儀礼とセクシュアリティ—」では、初潮という個別の経験が、儀礼を通じて社会的・宇宙的な広がりの中に位置づけられていく様相が、精細な記述とともに描かれる。初潮を迎えた少女は3日間隔離され、その間の身の回りの世話は同じ家に住む母親以外の既婚女性によって行われる。母親は泣きうたを歌い、近所の女性や友人、母方の伯父などからは祝いの品が贈られる。4日目に執り行われる儀礼には7人の既婚女性と7人の幼い子供が参加し、その後、親戚や隣人のための宴が催される。こうして初潮というある個人的な経験によって、「個」が関係性の「全体」へと接合されていくという説明は、つぎに示される大地の女神の初潮を祝うロジョ祭をめぐる記述のなかでも繰り返される。著者は、ロジョ祭において、個々の女性にとって人生一度きりの初潮という経験を、恒例行事として普遍化させることは、女性の集合性に個を埋没させる可能性があることを認めている。しかし一方で、その経験を契機として、個人としての少女が共同性という社会的全体や女神という宇宙的全体のなかで自己を多層的に認識し、形成しているという示唆を導き出すのである。

つづく第4章「遊びとエロス—永遠の恋人にささげるブランコ歌—」では、未婚女子の儀礼におけるブランコ遊びの記述・分析を通じて、この世を超越した霊的なものとのつながりを希求するインド女性の行為主体性に視点が注がれる。彼女たちは、未だ経験したことのない男女のロマンス、そうした世俗的な恋愛関係を超越したクリシュナ神への思慕、さらには結婚後の故郷からの別離と幾重もの束縛を受け入れなければならない現実からのつかの間の逃避など、様々な思いを胸にブランコの揺れのなかで儀礼歌を紡いでいくという。ブランコの揺れがつくりだす身体および内面の蕩揺と恍惚状態によって、この世と、この世を超えた霊的で甘美な世界とのはざまを行ったり来たりするのである。しかし、超越の世界への一時の夢飛行は、ブランコの揺り戻しとともに終わりをづけ、少女たちは束縛に満ちた現実の世界へと再び引き戻されるという。著者は、このブランコ遊びに、現実に対する抵抗と諦念のあいだの

内面の揺れと、「聖なるものの存在をこの世に浮かび上がらせる」(167頁) 宗教的可能性を見出している。

第5章「裏庭の政治—派閥政治と贈与—」では、前章までに論じられてきた「ウチの領域」の内部に広がる女性の生活世界と、そこに立ち現れる女性の行為主体性が、ソトの領域に分類される政治の世界と接合していく過程が論じられる。まず、ゴロ・マントリ村における二つの派閥をめぐる村人の関係性と、派閥間の利害対立による村内の緊張状況が説明される。つぎに、派閥政治とは一見無関係にみえる女性たちの村落政治における役割が示される。村の女性は、贈与交換や儀礼など、女性たちがウチの領域で担ってきた非政治的で伝統的な行為を通じて、派閥間の争いによって亀裂が生じた世帯間関係の回復と維持に積極的に関わっているという。著者は、女性たちの政治とのかかわりを「裏庭の政治」と名づけ、こうした状況のなかに、ウチとソトを架橋する女性の行為主体性を見出すのである。

第6章「『スマート』なふるまいとは—都市女性の新しい美学—」では、村落から都市部へと視点が移され、中間層女性の状況が論じられる。著者がここで刮目するのは、オディシャー都市部の中間層女性が希求する「ふるまいの美学」である。彼女たちが追い求めるのは、西洋女性や西洋化されたインド女性のような個人主義的で身勝手な女性でも、村社会の因習にとらわれた古めかしい女性でもない。都市の女性としての身体技法を身につけ、個性性と関係性のあいだで精妙なバランスを保持できる「スマート」な女性である。著者は、タパンの議論を引きながら、都市中間層の女性たちによる、関係性や状況に依存的なふるまいと行為主体性の発露は、不特定な他者のみでなく「具体的で固有」の他者のまなざしが想定されているがゆえであると指摘する。ただしそれは、他者の視線に従順で脆弱な女性の「自己」を示すものではなく、「近代」と「伝統」の間にあるいくつもの身体技法を身に着け、状況に応じたふるまいを美しく表現できるしなやかな「自己」であると結論づける。

終章「ポストコロニアルをこえて」では、インド女性に対しての、ジェンダー・ヒエラルヒーや家父長構造に埋没しているという消極的なイメージから、周囲との相互行為を通じて反照的で再帰的な自己を構築し、自己の価値を再定義しているという積極的なイメージへの転換が再び強調される。最後に、社会変化の潮流のなかで、それまでウチの領域

で伝統を守り、領域内の様々な関係性の結節点として、個人間、世帯間のつながりを構築してきた女性たちが、今後ジェンダーの二分法によって隔てられた世界を架橋し、これからのグローバル・インドの一端を担っていくという可能性と期待が示めされ、本書は締めくくられている。

以上各章を見てきたように、本書では、著者がフィールドでの様々な体験と、そこで目にした女性の生活世界が、丁寧な描写によって鮮やかに浮かび上がり、重層的で深みのある民族誌が紡ぎ出されている。さらに、巧みな措辞によって織りなされる分析や議論が、豊かな記述と一体となり、オディシャー女性の世界観が壮大な広がりとともに表現されている。評者自身、ウッタル・プラデーシュ州の村落で女性たちを対象とした人類学的研究に関わっているが、著者が20年もの歳月をかけて収集した民族誌的記述には驚きも多く、大変示唆的であったことは言うまでもない。それを踏まえたうえで、若干の検討事項を以下に述べておきたい。

一点目は、本書の鍵概念である「ポストコロニアル」と「行為主体性」という語彙の使用と提示についてである。著者が概念の提示に慎重であることは序論の説明からも一目瞭然であり、この概念が示す対象を読み手が明確にイメージできるよう定義と解釈がなされている。にもかかわらず、各章における具体的な記述と分析のなかでは、そのことが十分に意味をなしていないように思われる。とりわけ、各章で導かれる丹念で深遠な議論のなかでは、かえって概念の平板さが際立ち、違和感を覚えるのである。冒頭で概念設定をするという提示方法は、議論の重複や矛盾を回避するうえでは有効な側面もある。だが、著者自身が論じているように、これらの概念はともに、すでにいくつものパースペクティブが付与されており、複雑で重層的な意味を内包する。こうした概念上の性質がゆえに、あらかじめ固定化されることによって、その奥行きが損なわれるのではないかと考えられる。むしろ各概念が包摂する複雑な意味や解釈を、事例や議論の文脈に合わせてその都度解体し、具体的に説明を加えることで、本書が一貫して主張する女性の重層性や多元性をより説得力を持って示すことができたのではないか。

二点目は、一点目の検討事項とも関わるが、女性の「行為主体性」のとらえ方についてである。女性の行為主体性を浮き彫りにする作業は本

書の目的そのものであるといえる。また、この作業が、構造論に埋没してきたインド女性を再考するうえで重要な意味をもつことは、本書のなかで折に触れて示されているとおりである。ところが、各章の議論において、女性の行為主体性が十全に浮かび上がったかを振り返ると、若干の物足りなさが残る。というよりも、個としての「身体—人格」が、無限の共同性やコスモロジーに位置づけられていくスペクタクルな議論の過程で、むしろ女性たちの行為主体性はかすみ、オルタナティブな議論のなかに再び埋没していくような感覚すら覚えるのである。おそらくそれは、女性の行為主体性のリアリティ以上に、著者が思う行為主体性が前面に出されているからではないだろうか。一例として、第4章のブランコ遊びで繰り広げられる儀礼歌として少女の口から思い思いに発せられる歌詞には、彼女たちの内面が反映されているという。それはおそらく儀礼歌の即興性に依拠した視点であると思われる。だが、その歌詞は、母や姉、親族女性から伝え聞いたものが少女たちの身体に記憶として刻み込まれ、記憶の反復として無意識かつ無意味のうちに発せられた可能性も否定できない。もし儀礼歌が、少女の心の機微を映しだしており、神聖なる超越的エロスを希求する「行為主体性」の発露であるとするならば、儀礼歌を歌う前後の彼女たちの心情や、何を思いながら歌うのかを彼女たち自身の言葉で語らせるなど、その歌詞がどれほど内面化されているのかを裏付ける作業が必要ではなかったか。第4章に限らず、各章の議論に個々の女性たちの具体的な声を取り入れることで、著者のもう一つの主眼である「個性性」もさらに鮮明になり、より妥当性の高い行為主体論が展開できたのではないだろうか。

とはいえ、本書がインド女性をめぐる従来の議論に重要な視点の転換をもたらしたことは間違いない。また、インド女性の暮らしに初めて触れる読者にとっても、その実態が鮮明かつ表現豊かに示されており、理論本としてのみでなく読み物としての価値も高い。今後も、インドのジェンダー書として広く読まれることが期待される。